

58年ぶりの甲子園4強 そして、地元開催の国体へ



20年ぶりの甲子園行きを決め、抱き合う成高ナイン



金子 裕大さん(千葉市)

成田高校野球部主将。3番ファースト。同校58年ぶりの甲子園4強進出、ゆめ半島千葉国体出場の原動力となった

それは、全国高校野球選手権千葉大会の決勝戦だった。5回までゼロが並び、緊迫した投手戦。6回1死1・3塁のチャンスで、バッターボックスに立った。ツーストライクワンボールと追い込まれた4球目―無我夢中だった。思い切り振り抜いた打球はライト前へ伸び、値千金のタイムリーヒットに。打った瞬間のことは、今でも覚えていないという。気が付くと、1塁ベース上でガッツポーズをしていた。この1点が、甲子園行きの切符をもたらした。「普段はチームプレーに徹しようと心掛けています。でも、このときだけは一打者として、自分が絶対に決めてやるという気持ちで打席に入りました」

主将としてナインを引っ張り、チーム20年ぶりの甲子園出場、58年ぶりの甲子園ベスト4の原動力に。同時に地元開催のゆめ半島千葉国体出場を成し遂げた。

しかし、今回のチームは、当初から好結果を残してきたわけではなかった。新人戦となる秋の県大会は、主力にけ

が人が続出し、2回戦敗退。万全の態勢で臨んだはずだった春の県大会も同じく2回戦で敗れた。何かを変えなければ…。

「送りバントや進塁打を確実にやる、協力して相手投手の癖を見抜くなど、チームとして戦うこと。これが、自分たちに足りない点だと気付きました」

選手同士のミーティングなどを通して、チームメイトに強く訴え続けた。仲間にも支えられて、徐々にチームが変わっていった。

こうして迎えた夏の大会。春とは見違えるチームになっていた。強豪を次々と撃破し、とうとう半世紀ぶりとなる甲子園4強まで突き進んだ。

「あのときは、負ける気がしませんでした」

秋のゆめ半島千葉国体では、初戦で敗退。実力を出し切れなかったことは悔しい。しかし、寮生活で同じ釜の飯を食った仲間たちと、少しでも長くグラウンドに立てたことが何よりうれしかった。

「最高の仲間たち！3年間ありがとう」



千葉大会決勝で安打を放ち、ガッツポーズする金子さん

編集後記

最近、ちょっとしたことに付けられる「症候群」という言葉。これがスーパーウーマンに付くと？一見、颯爽とした女性に関する社会現象を指しているようですが、実はれっきとした病症(5P参照)です。わが家の専業主婦にこの症状を話し、無縁と言ったとたん見る見る顔色が一変。同様の経験ならいくらでもあると、その後は日ごろの不満を一気に浴びせられる羽目に。原因が同居している旧“スーパーウーマン”にあるのは明白で、こちらは古くからある「嫁姑症候群」。どちらの症状にも夫の理解が一番の特効薬のようです。



成田市役所本庁舎(行政棟、議会棟、消防本部、成田消防署)はISO14001の認証登録を受けています。

平成23年1月15日号 No.1187

成田市のホームページ <http://www.city.narita.chiba.jp>